

海外子女教育振興財団にて出版されている
月刊「海外子女教育」2021年7月号
にて中野東中の取り組みが紹介されました。
(一部個人情報の箇所を編集しています)
ありがとうございました!!

海外子女教育振興財団へのリンク

特集「公立小・中学校における帰国子女教育」

旧第三中学校に掲げられた中野東中学校の校名



今年の9月に落成する予定の新校舎(完成予想図)



<http://nk-nakanohigashi-ja.coocan.jp>

中野区立中野東中学校

二〇一八年に第三中学校と第十中学校が統合されて生まれた学校だが、第三中学校は一九七四年から研究協力校として学区外どころか中野区の外からも帰国子女を受け入れてきた伝統校だった。中野東中学校もその歴史を引き継ぎ、

往時と同様の充実した受け入れと指導を行っている。現在はJR東中野駅から徒歩五分の旧・第三中

学校の校舎を使っているが、今年九月から東京メトロ中野坂上駅に至近の場所に建てられる新校舎に移転する予定。

三中から引き継がれた
ノウハウ

現在、中野東中学校に在籍する総生徒数は三七五人。このうちお

よそ一五パーセントが帰国子女で、ほかにも外国籍の生徒が若干名いる。しかも今年の二月にはわずかに二週間で四人の編入生を海外から迎えるなど、日常的に「帰国生が増える」学校である。これらの帰国生の大半が学区外に住む。通学にかかる時間が片道一時間程度までであれば相談のうえで受け入れているのだ。そのうちおよそ半数が英語圏の出身で、日本人学校だけで学んできた生徒は数名。副校長の西田知之先生は「この学校には帰国生が多いので、全体にウェルカムな雰囲気があります。帰国生が来る」と校内を案内して回るのですが、在校生も『また来た！』と歓迎している様子で、なかには『私がお手伝いする』と言ってくる子もいます」と笑顔になる。

副校長をはじめとして、帰国生徒担当の土屋美樹先生、谷崎章子先生、さらには各学年に配置された三人の「帰国生徒コーディネーター」の教員で構成される「帰国適応委員会」を中心に全校一丸で取り組んでいる。土屋先生は第三中学校で六年間も勤務したうえで中野東中学校に来ているが、もうひとり最古参の先生がいるそうだ。谷崎先生も帰国子女教育に取り組

んですでに四年目を迎えている。つまり帰国子女教育のノウハウが第三中学校から引き継がれているということだ。その最大の目的は、「帰国生徒が安心して、日本の学校で学び続けられるようにすること」だろう。

充実した日本語指導

たとえば日本語力あるはいはいずれかの教科での学力に不安があった場合には、平常の授業時間中や放課後に個別指導を受けることができる。「僕は英語が得意だから、英語の時間に日本語を勉強したい」という子もいるし、逆に「英語の授業は楽しいから、ほかの時間にしてほしい」という子もいる。そういう希望を聞いたうえで一週間の時間割のなかから何曜日の何時間目という具合に四〜五時間までを選び出し、その時間に授業を受け持っていない先生が対応する。つまり全教員がこの個別指導を担当することになっている。生徒一人ひとりについて詳細なファイルをつくり、先生同士で引き継ぎながら、いわゆる日本語教材だけでなく学校行事の案内や生徒手帳の

記述なども使い、さらには教科ごとに特有の語彙なども教えていく。加えて、必要があれば中野区国際交流協会から派遣される講師による日本語指導を年間六十時間まで受けることもできるし、毎週水曜日と金曜日の午前中に国際交流協会の教室に出かけて日本語指導を受けてくることもできる。国際交流協会で蓄積されている日本語指

学 習 の 記 録	保護者より
9月28日 月曜 この日の①にたいして授業の進度が速いことに気が付いたので授業の進度を調整する。②の授業は予定通り進めたい。③の授業は予定通り進めたい。④の授業は予定通り進めたい。	
9月29日 火曜 ・英語の最初に書く作文、フリガナ、住所、名前、生年月日、ふりがなを自分で書けるように練習しました。 ・漢字カリキをしてみました。	サイン
10月2日 金曜 ・前日やた、住所にまだ心配がある様でそう一度はじめて確認しました。 ・月曜日の生徒会選挙についてウレ説明をして、投票用紙の書き方と教えました。	サイン
10月5日 月曜 ・生徒会選挙について確認しました。 ・他、決選投票について。 ・漢字テスト(心の語彙を扱った)	サイン

個別指導の生徒別ファイル。何をどのように指導したかが詳細に引き継がれていく

導のノウハウは、東中学校の先生がたにも共有される仕組みだ。また定期試験では、問題用紙にふりがなをつけたり時間を延長したり別室での受験を認めたりするなど、かなり柔軟な対応が用意されている。

英語で気持ちを解放する

一方、英語が堪能な子どもたちには、ネイティブスピーカーのALT (Assistant Language Teacher) と共に「よまほまなアクティビティ」を行う「国際交流教室」を年間十回開き、英語の保持伸長をはかりつつ日本の学校に通う不



個別指導の様子



国際交流教室の様子。今年はこの日が初回だったので、ALTの先生も「どんなことをやりたい？」と子どもたちに尋ねていた。

安を和らげている。

「三年生はいろいろと忙しくしている子も多いのですが、英語圏の学校に通っていた子はほとんどの全員、参加しています」と、土屋先生。「この教室は、学校の中でも独特の空間です。私もできるかぎり子どもたちの自由にさせていきますし、みんな気兼ねなくネイティブの発音で英語を話しています」帰国子女だけでなく英語部の生徒が参加することもある。進路が

決まった三年生が後輩たちに希望する進路を実現するための率直なアドバイスを行う会になることもある。

保護者同士の交流も

そもそも知り合いの保護者から口コミで聞いて東中学校への編入を希望してくる人も多いが、この学校では毎年三回帰国保護者会を行い、帰国生の保護者同士が交流する場も設けている。コロナ禍でいまはできなくなっているが、そうした機会には食事会も開かれていた。また生徒の国際交流教室と同様、この保護者会でも年度末になると「受験報告会」が開かれ、「貴重なホンの情報」が伝えられるのだそうだ。

保護者会メンバーの長澤さんは、当時小学四年生の長男と小学三年生の長女を連れてニューヨーク郊外に渡った。まるごと四年間、現地校に通わせて昨年九月にふたりにとも東中学校に編入。ウェブで検索してこの学校を見つけ、そこから学区内の住居を探したそうだ。

最初の数日間は毎日のように学校からも子どもたちの様子を報告する電話が入り、その気遣いがありがたかったと言う。

「駐在の場合、海外での生活はいつか終わります。その短い時間を帰国後の受験準備や日本の勉強だけに使うのはもったいないと思います。子どもたちには、海外では現地ではできないことを思う存分吸収して楽しんでほしいと思って生活してきました。そんな家族は多くはなかったのですが、日本に帰ってから大丈夫かな、と不安もありましたけどね」

先生がたの積極的な姿勢

先生がたも長澤さんのような海外生活の姿勢をあと押しするように語る。

まずは土屋先生。「いつも思っていることですが、帰国生は世界

へのかけ橋。一般の生徒にとっても学校にとっても、帰国生の存在はいいことばかりです。帰国生の成長が周囲の子どもたちの成長にもつながることが多いので、真心を込めて一人ひとりの生徒に合った指導をしていきたいと思っています」

次に谷崎先生。「公立のなかにもこういう学校があるんだと知っていたみたいです。ここには互いの異文化体験を語り合う日々があります」

そして西田副校長。「これからますますグローバル化する社会では、帰国生も含めて多様化してきます。この学校はそういう意味で未来の社会のスタンダードをつくっているという自負があります。帰国子女教育は本校の誇り。さまざまな不安をお持ちだと思いますが、それをいっしょに抱えながら、寄り添って受け入れていきたいと考えています。お待ちしています」

九月にオープンする新校舎では、個別指導のための小さな教室をたくさん用意しているのだそうだ。この学校に来る帰国生にとっては、海外では現地の勉強に専念していても大丈夫だということだろう。